

家いへにあれば

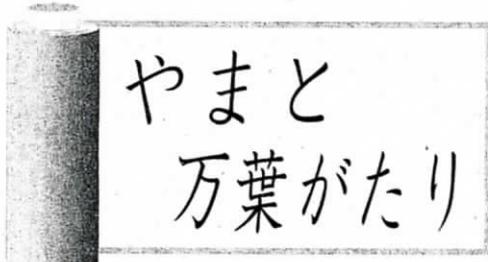
妹いもが手まかむ

草枕くさまくし 旅たびに臥ふせる この旅人たびとあはれ

(上宮聖徳皇子 卷三・四一五)

『日本書紀』推古天皇36(628)年3月2日条には、日本最古の日蝕ちくさくの記事があります。太陽が月に隠れる自然現象は当然ありましたが、史書に記される際には単なる事実の記録ではなく、天皇の病や死と結びつけられていました。推古天皇は2月27日に病に斃ぬれ、3月7日に崩御し

たがあります。この歌の作者である「上宮聖徳皇子」とは、いわゆる「聖徳太子」のことです。『日本書紀』では「厩戸豊聡耳皇子」とあり、推古天皇29(621)年2月5日に薨去しな、人々は悲しんで日月が光を失ったようだと書いたと記されています。なお、天寿国綱帳銘などで



は、622年2月22日に薨じたとあります。この歌は『万葉集』巻三の挽歌わんかの冒頭に置かれていて、次の四一六番歌は686年の歌ですから、この一首だけが極端に古い歌といえます。巻一や巻二でも同様に、突出して古い時代の人物の歌が冒頭に置かれており、いずれも伝説的な人物に

仮託した後の時代の歌と考えられています。「聖徳太子」とは後世の尊称で、『日本書紀』が編纂された720年には既に伝説化していたとみられま

す。行きずりの飢者うを神仙と見抜き自ら『万葉集』に収載さ

れたこの歌も、そうした伝説化の過程を伝えていきます。題詞には、龍田山の道端で亡くなっている人を見て「上宮聖徳皇子」が悲しみ悼んで詠んだとあります。類型的な鎮魂歌が「上宮聖徳皇子」の歌とあることで、『日本書紀』などとは異なる内容ながら、関連する歌として享受されました。(県立万葉文化館指導 研究員・井上さやか)

【訳】家いへにいたら妻の手を枕まくらとしてい

るであろうに、草を枕まくらの旅路たびぢに倒たふれているこの旅人たびとよ。ああ。

いざ子ども 早く日本へ

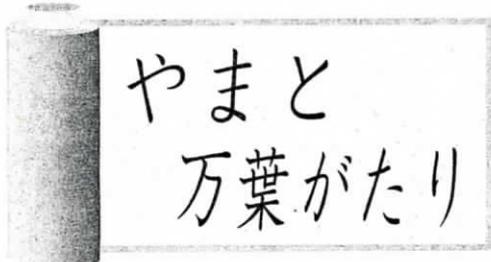
大伴の 御津の浜松

待ち恋ひぬらむ

山上憶良(巻一・六三)

この歌の作者の山上憶良は「貧窮問答歌」のような人生の悲哀を歌い上げた数々の歌を『万葉集』に残していますが、歌だけではなく漢詩や漢文も多く作っています。憶良作の「沈痾自哀文」は『万葉集』最長の漢文作品で、多くの漢籍を巧みに引用しつつ病の苦しさと生への希求を本格的漢文で叙述した名作です。こうした憶良の和漢両面にわたる文才は、遣唐使として中国へ渡った経験によって磨かれました。

701(大宝元年、それまで30年以上の長期にわたり中断されていた遣唐使が久しぶりに再開されることになり、憶良は遣唐少録(下級書記官)に任命



されました。使節長官の粟田真人は憶良と同族の出身で、憶良の能力を見込んでこのポストへ抜擢したとみられます。遣唐使一行は翌年渡海し、703(大宝3)年に長安で女帝武則天(則天武后)に謁見しました。この大宝遣唐使は、従来の古い国号「倭」に代わって新たに定めた国号

「日本」を中国王朝へ告知し、本格的な成文法として新たに制定した大宝律令の施行を伝えるという重要な任務を帯びていました。また、都の長安や制度文物を実見し、平城遷都や養老律令改定につながる新知見をもち帰るといいう大きな成果を上げました。憶良は長官の真人に随行し、704(慶雲元年)年に帰国したとみられます。この歌には「山上憶良、大唐に在る時臣憶良、大唐に在る時城遷都や養老律令改定に本郷を憶ひて作る」という題詞があり、

【訳】さあみんな、早く日本へ帰ろう。大伴の御津の浜の松も、その名のごとく待ち恋うているだろう。 憶良が遣唐使の任務を終えて祖国へ帰る直前に作った歌とされます。彼らが帰ろうとしている本郷の名は、『万葉集』(原文・漢字本文)でも「日本」という漢字表記で書かれています。新国号の披露という大役をつとめ上げて帰国に臨む遣唐使一行の自負と満ち足りた思いが、「日本」の2文字から読み取れるような気がします。(県立万葉文化館主任 研究員・竹内亮)

倭道は 雲隠りたり

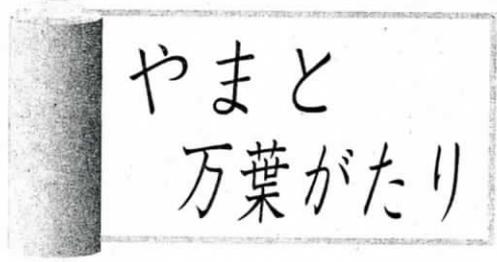
然れども わが振る袖を 無礼しと思ふな

児島(巻六・九六六)

『万葉集』には当時のみやこがあった大和(現在の奈良県)の地で作られた歌が多く収められていますが、みやこから遠く離れた地で大和の地名を詠み込んだ歌もまた多く作られました。

(この歌の作者の児島は筑紫現在の福岡県)に居住していた女性で、筑紫娘子、遊行女

婦などとも呼ばれ、大宰府の官人たちが催す宴席に待るのを生業としていました。728(神亀5)年ごろに大宰帥(大宰府の長官)として筑紫へ赴任した大伴旅人は、筑前守(現在の福岡県中部の行政長官)であった山上憶良らと共に筑紫歌壇と後に称された歌人グループを形成



し、多くの宴を筑紫の地で主催しました。児島はそうした宴席を通じて旅人と親交を結んだらしく、730(天平2)年に旅人が当時の中央政府の実質的首席として大納言へ任じられ筑紫を離れる際、別れを惜しんでこの歌を旅人に贈りました。

左注によると、この歌は旅人がみやこへ向

かう途中に馬を水城で駐めて大宰府政庁を振り返った際、見送りの一行の中にいた児島が歌ったとあります。水城とは異国の侵攻から大宰府を守るために築かれた防衛施設で、大宰府と博多湾をつなぐ平野を遮断する位置に

【訳】大和道は雲に隠れています。あなたの目にふれずとも、私の振る袖を無礼とお思いくださいますな。

全長約1・2キロの長大な城壁を設け、幅60メートルに及ぶ外濠を伴った堅固な防塁です。水城の東西両端には門が設けられ、大宰府と平城京を結ぶ官道は東側の門を通過してました。この門を出ると遠く(県立万葉文化館主任 研究員・竹内亮)

大宰府都市圏の外側となり、巨大な土木構造物である水城は境界のランドマークとして当時の人々に意識されていたと考えられます。これから旅人が帰って行くみやこへと続く「倭道」は、筑紫に残る者たちにとっては雲の彼方であり、水城の威容こそが別離を象徴する景色として、人々の心に深く刻まれたことでしょう。